

野津本「北条系図・大友系図」は、縦三一・二糶、全長五四六糶、紙数十二枚の続紙に書かれた系図古写本であり、第七紙までの前半に桓武天皇から始まる平氏「北条系図」が記され、第八紙からの後半に大織冠鎌足から始まる藤原氏「大友系図」が記されている。そしてその前半と後半の間には、次のような奥書が記されている（九頁参照）。

彼本奥云

弘安九年九月七日、新旧校合写之了、

弘安十年八月十九日、於相州鎌倉郡龜谷郷

雪下屋形書之、円海法師

嘉元貳年庚申五月廿二日於野津院写伝之畢、

すなわち弘安九年（一一八六）、新旧の系図を校合書写して作成された原本が、翌弘安十年、鎌倉龜谷郷雪下の屋形で書き写され、それが嘉元二年（一一三〇四）、豊後国の野津院で書き写されたという。

ここで問題となるのは、現存する本系図が、はたして嘉元二年に野津院で書き写された野津本そのものなのか、それと

も野津本の系図をさらに後世になってから写したもののかという点であろう。言い換えるならばそれは、右に掲げた嘉元二年の奥書が、本系図そのものの書写奥書なのか、それとも本系図の原本となった古写本の本奥書なのかという問題とも言える。

この問題について、本系図を初めて学界に紹介された田中稔氏は、次のように考察を加えておられる〔一〕。すなわち田中氏は、

嘉元二年奥書の行頭が、「彼本奥云」の下にある弘安九年奥書以下と揃っていること、また奥書の文字の書き方が三者同じであることから推すと、嘉元二年奥書もまた本奥書ではないかと考えることも無理ではない。

として、本系図が嘉元二年以降に写された可能性を残しつつも、

弘安十年・嘉元二年奥書間の行間がやや広いことより考えると、嘉元二年奥書を本奥書としてしまうことには疑点が残る。

とされ、さらに

本系図は書風・紙質より推すと、いずれにせよ一四世紀

を降るものとは考えられない。

として、その記載内容を緻密に検討された結果、嘉元二年成立と矛盾する記載は一切認められないとして、

『北条系図』の嘉元二年奥書は本奥書ではなく、その書写奥書であり、『大友系図』もまたこの嘉元二年五月頃に書写されたものとして誤ないのではなからうか。

と結論付けておられる。この結論はほぼそのまま渡辺澄夫氏によっても踏襲されており⁽²⁾、ここに付け加えるべきものは特にない。

しかしながら本系図は、原本を敷き写したと思われる写本独特の勢いのなさに加え⁽³⁾、シミ・虫損などが殆ど認められないという状態の良さも相俟って、一見すると、比較的新しい写本のように見なされる危険性がある。そこで本解説では、書風・紙質・記載内容といった、既に田中・渡辺両氏によつて検討の尽くされた問題ではなく、なぜ「北条系図」と「大友系図」が一卷に書き継がれたのかという、本系図の成立要因そのものから、本系図の成立が嘉元二年より後に降るものではあり得ないことを論証し、以て本系図の史料価値を再確認しておこうと思う。

本系図は、上述した嘉元二年の奥書から考えても、また野津家の末裔である吉岡家を通じて福富家文書に伝来したというその伝来過程から考えても、大友一族の野津家において書写されたものと見なしてほぼ間違いない。とすると、その成立の背景を探るためには、まずなぜ野津家において北条家の系図が書き写され、しかもその後半に大友家の系図が書き継がれて、北条系図と大友系図の合体したものが作られたのかという点が問題とされなければなるまい。

本解説ではこの問題を、嘉元二年当時の大友家当主貞親の妹(叔母・大友頼泰女)が、時の得宗北条貞時の叔父宗頼と結婚し、一子宗方を為しているという点から考え直してみた(一九頁図I参照)。実際、本系図を見ても、大友頼泰女には「相模修理亮宗頼室」という注記があり、北条宗方には「母大友兵庫頭女」と注記されている(二〇頁・二頁)。

そもそも大友家は、相模国大友郷を本貫地とする東国御家人であり、文永九年(一二七二)、蒙古襲来に対応するため、大友頼泰の代に豊後国に下向した西遷御家人であった⁽⁴⁾。また一方の北条宗頼は、時頼の妾腹の子にして時宗の異母弟に当たり、同じく蒙古襲来に対応するため、建治二年(一二

七六)、長門・周防両国の守護となり、得宗の一族として初めて現地に下向した人物であった^⑤。

そんな北条宗頼と大友頼泰女の間、弘安元年(一二七八)、北条宗方が生まれていることを考えるならば^⑥、二人は建治二年、宗頼が現地に下向してきてまもなく、言うなれば蒙古襲来の最前線で結ばれたと言うことが出来よう。ところが宗頼は、本系図にも「弘安二年六月四日為温於長州卒、為異国警固発向長州」と注記されているとおり(三三頁)、現地に下向してわずか三年後の弘安二年、任国の長門で没してしまふ。この時、宗方は数え年でわずか二歳であり、恐らくは父の記憶もないまま、母方の大友家で養育されたものと思われる。

実際、宗方は、二十歳になった永仁五年(一二九七)、六波羅探題北方に任じられた際も、まず京の大友家の屋形に入っており^⑦、宗方にとつて大友家は、単なる外戚以上の存在であったことが間違いない。そしてまたそのことは、大友家にとつても北条宗方という存在が、得宗一門との重要なコネクションとなり得たことを意味している。しかるにその後、宗方は二十代後半にして「内ノ執権ヲシ、侍所ノ代官ナント

ヲソ、大方天下ノ事ヲ行ケリ」(『保暦間記』)と伝えられる権勢を誇った時もつかの間、嘉元三年五月、いわゆる嘉元の乱(北条宗方の乱)の首謀者として誅殺されてしまふ^⑧。

本系図は、まさしくその嘉元の乱の前年に作成されたものであり、それはあたかも宗方が得宗家の内管領・侍所所司として権勢を振るっていた絶頂期に相当する。大友家にとつて、宗方との姻戚関係を誇示するのにこれ以上の時期はなからう。そしてまたそのことは逆に言うと、嘉元の乱以降、大友家がこのような系図を書写するなどということは、自ら謀反人宗方の外戚であったことを示すことに他ならず、およそあり得る話ではないということになる^⑨。まして正慶二年(元弘三・一二三三)、鎮西探題北条英時を討ち滅ぼした後の大友家にとつて、北条家との姻戚関係は決して誇るべき過去ではない。

さらに建武三年(一二三六)、九州に敗走してきた足利尊氏が、大友氏を味方に引き入れるため、「兄弟二おきては、猶子の儀にてあるへく候」という御判御教書を大友千代松丸(氏泰)に与えて以降、大友氏は源姓で呼ばれるようになることが、夙に渡辺澄夫氏によって指摘されている^⑩。とす

ると、大織冠鎌足を祖とする藤原姓で記された本系図は、南北朝の大夫家にとつて都合のいいものとは言い難い。

以上の状況証拠を考え合わせるならば、本系図はやはり奥書どおり、嘉元二年に書写・作成されたものとして誤りないものと言える。無論、たとえば十五世紀以降の何らかの時点において、上述してきた政治的事情とは全く無関係に書写されたとすれば話は別だが、本系図が「書風・紙質」より推して、「一四世紀を降るものとは考えられない」ことは、冒頭に述べた田中稔氏の鑑識眼に確かなことなのである。

【註】

- (1) 田中稔氏「史料紹介野津本『北条系図、大友系図』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第五集、一九八五年)
- (2) 渡辺澄夫氏「野津本『大友系図』の紹介―大友氏出自に関する決定的史料―」(『大分県地方史』第一三四号、一九八九年)
- (3) 藤本正行氏のご教示によると、本系図には血統の罫線を引く際にできる定規の痕跡が全く認められない

ことと、裏面が透けて見える料紙を用いていることから、原本を敷き写したことがほぼ間違いないだろうとのことである。

- (4) 渡辺澄夫氏「豊後大友氏の下向土着と嫡子単独相続の問題」(『大分県地方史』二五号、一九六一年)、芥川竜男氏「豊後大友氏と相模大友郷」(『日本歴史』二八七号、一九七二年)

- (5) 「長門国守護職次第」(『続群書類従』卷九一)、北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』「北条宗頼」の項(新人物往来社、二〇〇一年)

- (6) 「鎌倉年代記」「武家年代記」(増補『続史料大成』所収)等によると、宗方は嘉元三年(一一三〇五)、二十八歳で誅されており、弘安元年生まれと推定される。

- (7) 「鎌倉大日記」(増補『続史料大成』所収)永仁五年条に「六月廿三日宗方立鎌倉、七月六日入洛、住北方、先落着大友屋形」とある。

- (8) 嘉元の乱については、細川重男氏『鎌倉政権得宗專制論』(吉川弘文館、二〇〇〇年)第二部第二章

「嘉元の乱と北条貞時政権」（初出は『立正史学』六九号、一九九一年）に詳細な研究がある。他に高橋慎一郎氏「北条時村と嘉元の乱」（『日本歴史』五五三号、一九九四年）等を参照。

(9) 前掲〔註(8)〕細川論文の註(10)によると、大友頼泰の弟で野津頼宗の兄に当たる大友能泰は、嘉元の乱に縁座して豊後国国崎郡来繩郷福成名を収公されているという。

(10) 「豊後大友氏の出自について」（『大分県地方史』二四号、一九六〇年、後に『増訂豊後大友氏の研究』第一法規、一九八二年に所収）

図1

